



# 東海地域における古墳時代初頭期の集落

～大阪府の状況との比較から～

## 1 | はじめに

ここでは、東海地域における古墳時代初頭期の集落遺跡の動向とその特徴について、大阪府を中心とする畿内の集落遺跡の状況<sup>1)</sup>、あるいは他地域系土器のありかた等を比較することで述べていきたい。それによって、八王子遺跡の位置付けを少しおりとも明確にする一助になればと考える。

なお、東海地域とはおおむね伊勢湾沿岸地域を意味しており、伊勢・尾張・美濃がその主体となり、広大である。しかし筆者の力量不足から、東海地域の中でも八王子遺跡の所在する尾張の濃尾平野部と、近年、物流拠点としての性格が明らかになりつつある伊勢の雲出川流域の資料を中心にあつかったにすぎない。また、ここに言う古墳時代初頭期とは、東海の土器様式で廻間I～III式前半、畿内の庄内～布留前半を指しており、さらに画期をとらえるために弥生後期から記述した。

## 2 | 大阪の集落と他地域系土器

大阪府下では、弥生時代後期に主眼を置けば、集落遺跡の画期に大きく二つのパターンが見られる。すなわち、中河内地域とそれ以外の地域に分けられる。

まず中河内地域では、平野部で弥生前期に始まる拠点集落は継続し、基本的にV様式中頃で消滅する。八尾市田井中遺跡、同 恩智遺跡等がそれにあたる。ただし、亀井遺跡のみはV様式中

頃に一時的に希薄になるも、終末期まで継続する。次にその他の地域。つまり東部摂津・北河内・南河内・和泉地域では、拠点集落は基本的にIV様式で消滅、あるいは衰退する。衰退しつつも若干の継続を示すもの、高地性集落の出現、あるいは小集落が消長をくり返す場合等々、V様式段階の在り方は地域により差異がある。なお、例外的に北河内地域の雁屋遺跡のみが、亀井遺跡と同様に終末期まで継続する。つまり、大阪では両遺跡のみが、大和盆地<sup>2)</sup>と同様の継続期間を有することになる。また、これらの地域では、後期初頭から前半期に集住型の巨大高地性集落<sup>3)</sup>を形成することも特徴的である。これは低地の拠点集落構成員の一部によって形成されたと考えられる。物流面では、後期初頭段階の集住型巨大高地性集落を舞台に活発になるようである。

古墳時代初頭の庄内期になると、多くの場合、弥生時代とは位置を変えて新たな遺跡が展開するようになり、巨大な画期と理解できる。これらには、小規模単発的で短期間に出現と消滅のみられるものと、一定程度の継続性を示すものがある。後者の場合でも、布留1～2程度で消滅するよう、そこにも大きな画期がある。その後、再度集落立地を替え、局所的に布留3期から新たな遺跡の展開が始まり、初期須恵器段階で最盛期をむかえる。

庄内期以降の集落遺跡の展開は、河川流域に一定の距離を有しつつ分布する弥生時代のそれと全く異なるものである。すなわち、物流の経路上、つまり瀬戸内諸地域と中河内、東部摂津地域の結



節点にある吹田市域の垂水南遺跡や上町台地北端の崇禪寺遺跡、および旧大和川流域に立地する中河内地域の諸遺跡、あるいは淀川に流れ込む河川流域に新たに出現する東部摂津地域の諸遺跡に重点が移行している、と理解できる。これは、他地域系土器の占める割合が高いことがひとつの目安になるのであるが、土器の問題に止まらない。それら遺跡の継続期間の安定、その他文物の流入面からも、各地域内での優位は確認できるのであり、これら集落遺跡を背景にして、前期古墳の築造される場合も多い<sup>4)</sup>、と考える。また、旧大和川流域に中田遺跡群、加美・久宝寺遺跡群と呼べる集住による巨大拠点が出現したことでも重要である<sup>5)</sup>。これ以外の地域、つまり北・南河内、和泉地域はいわゆる「伝統的第V様式」段階に止まり、閉鎖的、単発的集落が展開<sup>6)</sup>する。つまり、本段階は、地域によって非常にかたよった在り方を示していることが解る。

弥生時代後期初頭、および庄内期新相～布留期初頭に他地域系土器の搬入が顕著になる。特に後者段階に顕著であり、その地域も北部九州を除く西日本諸地域、つまり阿波、讃岐、吉備、山陰地域等と広大になる。その一方で、大和盆地を含む東日本諸地域からの流入は、極めて希薄である<sup>7)</sup>。西日本諸地域、および中河内地域の土器は、大和盆地東南部にも入っていることから、中河内は西日本諸地域と大和を結ぶ中継点としての役割を担つたとも考えられる。

### 3 | 東海地域の集落遺跡

東海地域の弥生時代の拠点集落についての詳細は勉強不足ながら、赤塚次郎氏は朝日遺跡の状況を述べることで、東海地域全域にも普遍化できるとしている<sup>8)</sup>。それによれば、朝日遺跡では山中式後期に再掘削された南集落の環濠が、廻間I式初頭段階から開始された大量の土器投棄により埋没し、急速に衰退して求心力が喪失して散漫な遺

構群が点在するにすぎなくなるとしている。同様の状況は、愛知県見晴台遺跡・大廻間遺跡・中根山遺跡・古井遺跡群・欠山遺跡・高井遺跡等の他、三重県草山遺跡・阿形遺跡等でも確認できることを述べている。そして、これら拠点的集落の解体に呼応して、廻間I式期に爆発的な集落遺跡の増加が認められる。また、同様の状況が西美濃・伊勢地域の伊勢湾沿岸部に普遍化できると言う。さらに、西三河地域以東でも同様の状況が時期を微妙に遅らせながら東漸することも述べている。最近の知見として、上記の単発的集落とは別に、濃尾平野では八王子遺跡周辺と津島遺跡周辺、美濃地域では荒尾南遺跡周辺、西三河地域では古井遺跡周辺で、遺跡群を形成するとの教示<sup>9)</sup>も得た。

廻間様式前後の集落遺跡の消長についても、赤塚氏によってまとめられている（図2参照）。そこから得られる情報を筆者なりにまとめれば以下のようになる。

- ・廻間I式段階で出現、あるいは存在が明確になる遺跡が目立つ。また、それらの遺跡も廻間III式の中で消滅するものが目立つが、その間の廻間II式初頭にみられる第1次拡散期をはさんで、消滅・衰退するものがある反面、出現する遺跡もある。画期ととらえられる。
- ・濃尾平野部と西三河地域では廻間I式以降の集落が明確になり、しかも継続性を示す。それに対して、名古屋台地では弥生集落の盛行に比較して、地域的には衰退傾向を示し、継続性を示さず短期間で消長する。府下では、弥生時代後期から古墳時代初頭期の集落変動の中で明らかに地域的な優劣の差、あるいは同一地域にあっても立地する河川流域の移動が認められる。同様の状況があるのかどうか、遺跡内容が明らかになる必要があり、東海地域にあっては今後の課題になると考えられる。
- ・なお、図2段階では明確でなかった伊勢地域の状況も明らかになりつつある。すなわち、雲出川下流域において片部・貝蔵遺跡、雲出島貫遺跡等の廻間様式段階の集落遺跡の展開が明らかに



なった。

土器の交流については、東海系が拡散する時期が集中することを指摘している。すなわち、第1次拡散期は廻間Ⅱ式初頭でもっぱら東方へ向かい、第2次拡散期は廻間Ⅱ式末葉～廻間Ⅲ式初頭で西方に重点があるもの、としている。以上は東海系の外部地域への移動であるが、その一方で他地域の土器が東海地域に流入することはほとんど確認できず、まして様式内に組込まれることもないことを述べている。

## 4 | 東海地域の物流ルート

大和盆地や大阪と非常に異なるのは、濃尾平野には他地域系土器が流入しないことである。現在の調査の進行状況からすれば、本地域全体に他地域系の流入がない場合と、濃尾平野における流入拠点となる遺跡が未発見<sup>10)</sup>である二つの場合を考えられる。本稿では現在の状況に則して、前者の立場で述べる。

東海地域に他地域系の搬入がないにしても、搬出に関わったのは確かである。近江地域の物流拠

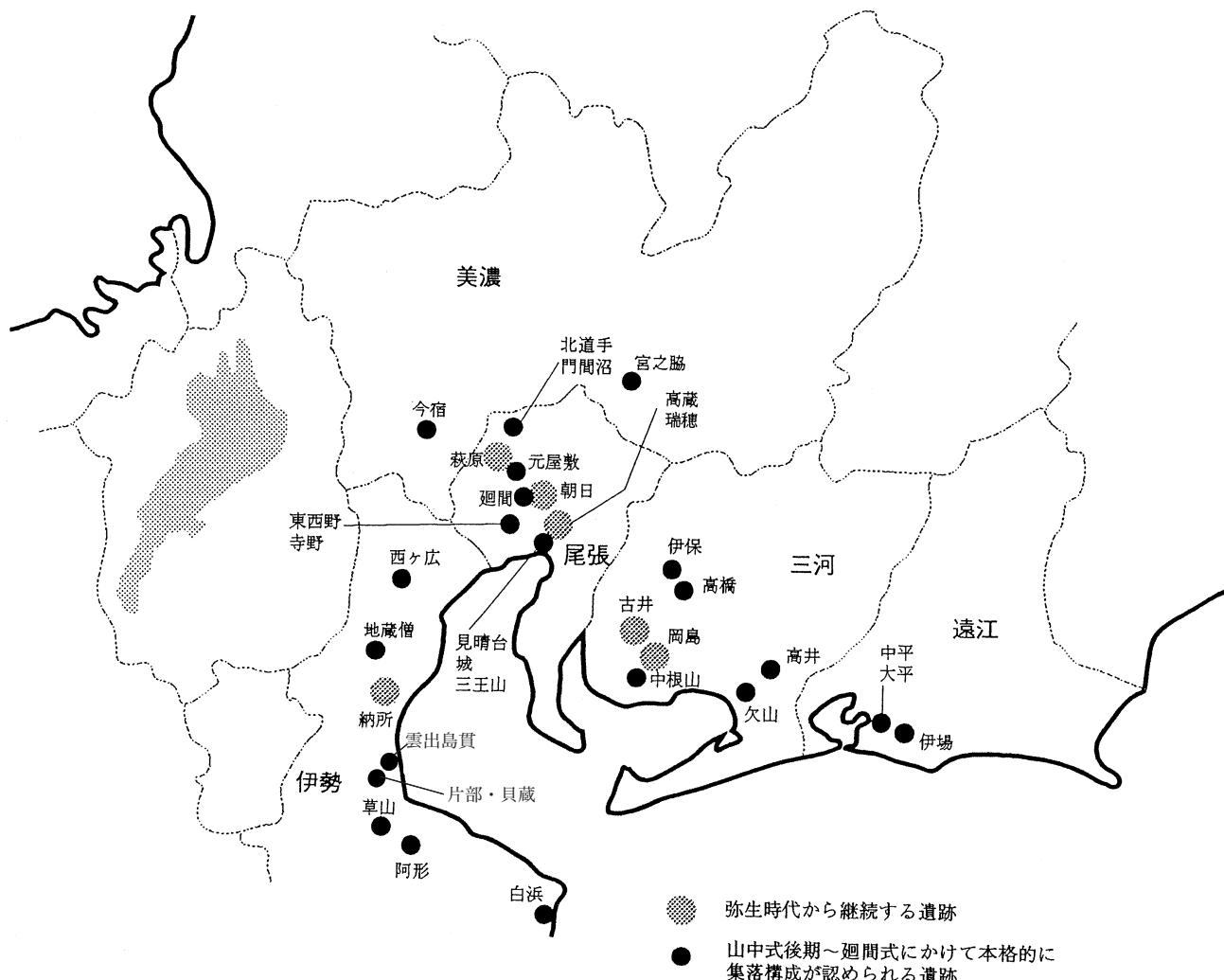


図1 東海地域主要遺跡(註8文献を一部改変)

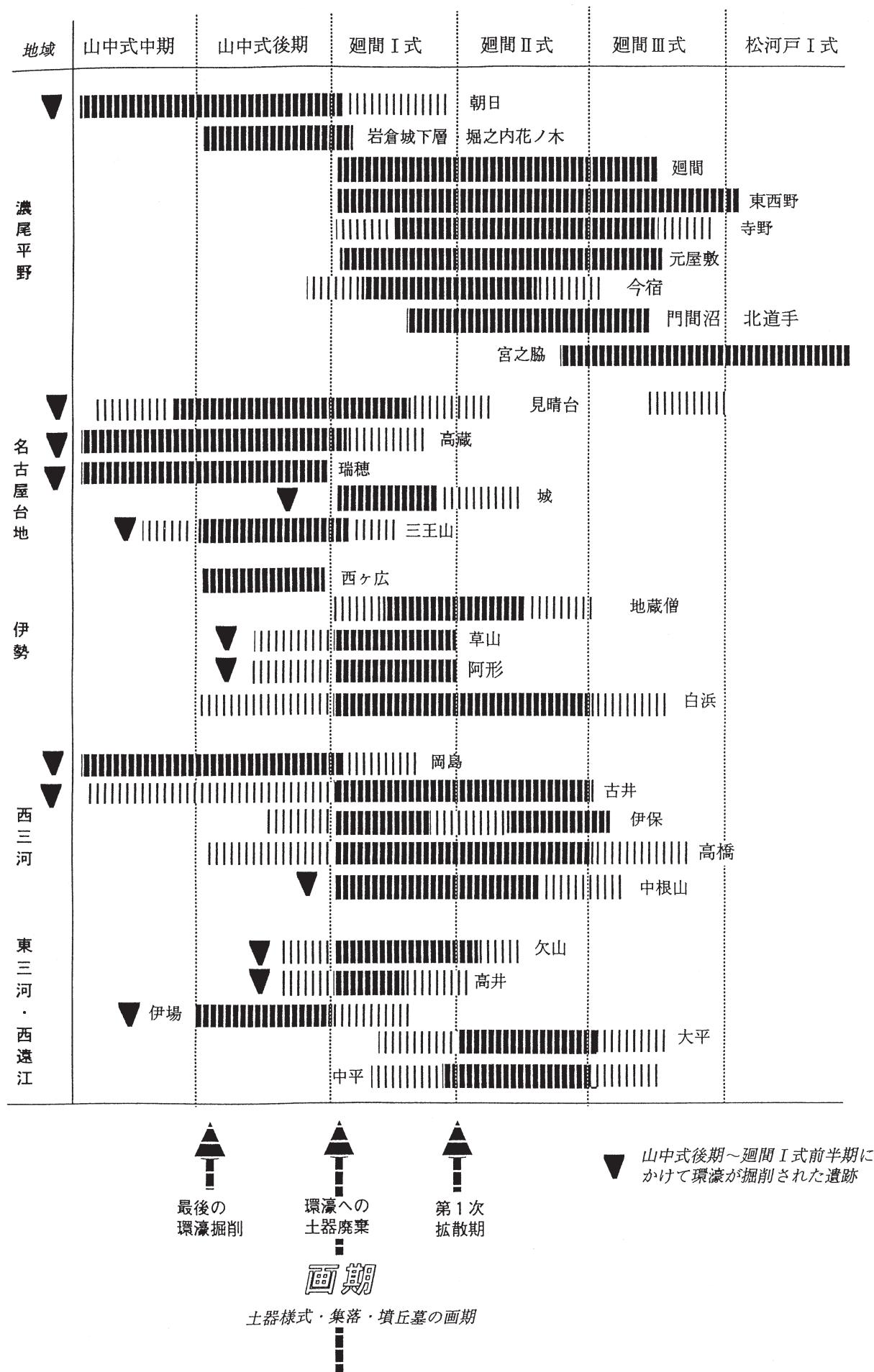


図2 東海地域主要遺跡の消長(註8文献より)



点と目される湖北の近江町黒田遺跡<sup>11)</sup>、湖東の能登川町斗西遺跡<sup>12)</sup>、湖南の守山市下長遺跡<sup>13)</sup>では多数の東海系（高坏、壺は在地化するため、S字状口縁台付壺）が出土しており、東海の中でも美濃を含む濃尾平野に立地する遺跡が関与したと考えることは自然である。また、穂積裕昌氏が指摘するように、纏向遺跡出土のパレス壺等は東海の中でも濃尾系と考えられ、伊勢を経由して入ったと考えられる。さらに、同氏は、弘法山古墳のパレス壺等から、東山道筋は濃尾からの搬入ルートであったことを示唆<sup>14)</sup>している。以上のこととは、濃尾平野が物流の搬出拠点であったことを示している。

それでは、いかなる理由で他地域系の搬入が認められないであろうか。実は同様の傾向を示す地域として山陰、阿波地域等、あるいは在地化し

た東海系を除外した北陸地域があり、参考になる。これらの地域の土器は、他地域で多数が出土するが、それに対して地域内で他地域からの搬入を示す土器は微々たるものである。西日本の物流拠点と考えられる遺跡を検討すると、当時の物流は西方へ、極めて一方的である場合が多く、その逆は弱い。ちなみに、物流の中継拠点と考えられる岡山県足守川流域の諸遺跡では山陰、讃岐系は多いが、東方からの搬入は極めて少ないとそれを示している。これについて筆者は、物流ルートの始点になる場合に生じ得る状況と考えている。あるいは濃尾平野も、物流の中継拠点ではなく、むしろ始点である可能性も視野に入れておきたい。

ところで、重要な点は同じ東海地域とはいっても、尾張と伊勢は状況がかなり異なることが明らかになりつつある。伊勢地域の雲出川流域にある

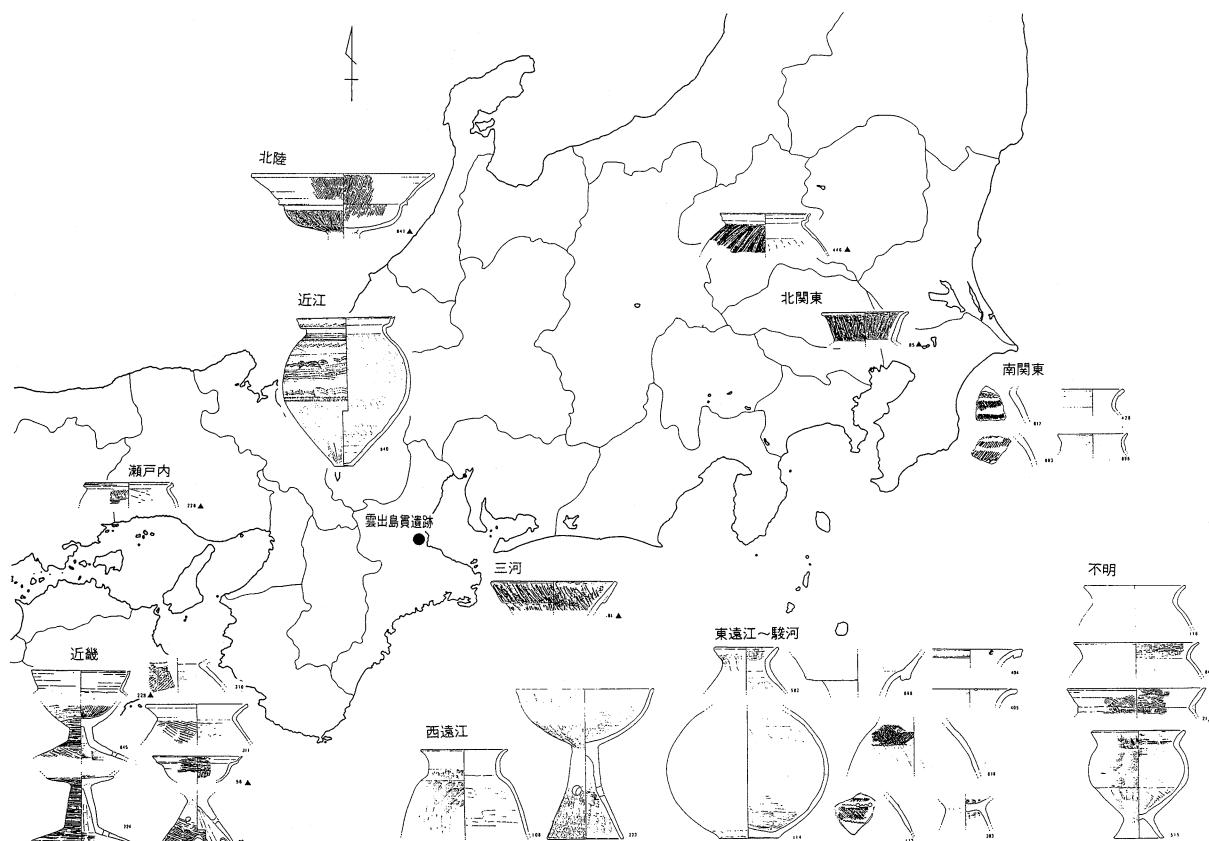


図3 三重県雲出島賈遺跡出土の搬入土器(註16文献より)



雲出島貫遺跡<sup>15)</sup>の状況がそれを示している。他地域系土器の状況<sup>16)</sup>をまとめれば以下のとおりである。

- ・三河、遠江、駿河、関東等の東日本系の土器が一定数出土している。このような状況は、伊勢地域の中でも本遺跡（あるいは雲出川流域）の特徴で、一般的ではない。なお、近江と北陸系<sup>17)</sup>も各1点が出土している。

- ・他地域系土器の搬入される時期については、近江系が島貫Ⅱ期古相で最も古いが少量である。その後、庄内期新相に併行する島貫Ⅱ期新相を境に一気に量が増え、布留期初頭併行の島貫Ⅲ期に至る。

- ・他地域系土器の流れは東方から西方に向けてが強く、その逆は極めて弱い。

- ・西日本地域からの搬入は極めて少ない。山陰、吉備、讃岐、阿波系等は皆無である。

- ・布留甕が一定数出土する。伊勢地域の他遺跡でも、布留甕の出土することはあっても単品か微量である<sup>18)</sup>。

つまり、当該期の東海にも西日本と同様の港湾的機能を有した遺跡が存在したことが確認できるのである。伊勢は、嬉野町片部・貝蔵遺跡も含めて、雲出川流域に港湾的機能があったことは確実である。さらに、漠然と東海系とされてきたS字状口縁台付甕の砂礫も雲出川流域が起源地であること<sup>19)</sup>も重要である。伊勢を港湾の一つとする経路は、かつて田口一郎氏が述べたとおり、海浜部のいわゆる東海道筋で東国とつながっていたことが確認されつつある<sup>20)</sup>。

以上のことから、尾張と伊勢は同じ東海地域にありながら関係した主要な物流ルートは、大きく異なった可能性がある。伊勢は東海道筋を通じて東国と大和の中継的位置を占め、尾張は東山道筋を通じて中部地域と、あるいは近江、北陸とも強くつながったとも考えられる。

## 5 | まとめ

以上の状況を総合すると、集落遺跡の消長における画期、集落遺跡の在り方、土器交流の活発化する時期等において、大和盆地や大阪の状況と東海地域の状況が極めて類似していることに気付く。

集落変遷の画期については、弥生集落が後期終末まで継続する点は、亀井、雁屋遺跡、および大和盆地と東海地域は同様である。つまり、弥生集落の断絶で確認できる画期は近畿周辺でIV様式末、中河内でV様式中頃、中河内の一部と大和、東海でV様式終末へと時期差を生じつつ認められる。さらに、古墳時代初頭の廻間様式、庄内様式からの新たな集落遺跡の展開と、廻間Ⅱ式と庄内後半からの盛行、廻間Ⅲ式後半と布留中頃からの急激な消滅、あるいは衰退はほとんど幾を一にした状況と理解できる。ただし、東海地域では第1次拡散期である廻間Ⅱ式初頭をはさんで、集落遺跡の消長が示されているが、畿内では確認できない状況である。その解明は将来の課題とせざるをえないが、八王子遺跡ではこの段階をはさんで方形区画、井泉遺構が廃絶していることからも、その段階の重要性が伺えよう。

赤塚氏の第1次拡散に対応する状況は、未確認である。S字状口縁台付甕A類段階の移動は大和盆地、および滋賀まではおよんでいるが、大阪府下では皆無である。古い段階の中河内産庄内甕を他地域で見かけることもない。しかし、府下で時々出土する才の町I・II式段階の吉備系甕<sup>21)</sup>がそれに対応する可能性は残されている。庄内期前半は、極めて限定された地域間での小規模な物流の段階であった、と考えられる。なお、八王子遺跡には他地域系はないが、これは庄内期前半に併行する廻間Ⅰ式期初頭～後半にかけての時期に造営の主体があることと、物流の始点地域に立地したことによるのだろう。

近畿において確認できる庄内期新相～布留期初頭の他地域土器の搬入に対応する物流は東海でも

認められる。すなわち、赤塚氏の言う東海系の第2次拡散、および雲出島貫遺跡を代表とする雲出川流域の状況である。廻間編年、島貫編年との対応も矛盾はない。ただし、物流の方向は全く異なる。東海では東から西へ、大阪では西から東への

方向性を持っている。すなわち、大和盆地東南部への流れであり、その逆の流れは弱い。また、同じ東海ではあっても、尾張と伊勢地域ではルートも大きく異なっていた可能性も指摘した。

### 【註記】

- 1) 山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域」『弥生文化博物館研究報告』第三集 大阪府立弥生文化博物館 1994、同「大阪府南部・石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」(大阪府立弥生文化博物館編『弥生時代の集落』学生社) 2001。
- 2) 寺沢薰「大和弥生社会の展開とその特質」『権原考古学研究所論集』第四 1979。
- 3) 摂津東部の古曾部・芝谷遺跡、和泉の觀音寺山遺跡の他、近江の熊野本遺跡、播磨東部の表山遺跡が相当する。
- 4) 集落遺跡の動向からすれば、玉手山古墳群は中河内地域を背景に築造されたと考えざるを得ない。少なくとも古墳群の立地する南河内地域には造営母体は確認できない。他に、東部摂津地域では同じく物流拠点と考えられる高槻市郡家川西遺跡の背後に弁天山古墳群が存在する。
- 5) ここに言う遺跡群と後述する東海地域で言われている遺跡群とは視点が異なる点を明記しておきたい。例えば、八王子遺跡は萩原遺跡群に属するように、東海で言われている遺跡群とは時期の異なる遺跡が移動を繰り返す「エリア」ほどの意味であり、一時期に限定すれば遺跡面積は狭い。一方、中河内で言う遺跡群とはそのエリアの中にいくつかの自然堤防と微低地を含みながらも一時期に形成された集住状況を指している。同程度の集住は、西日本では奈良県纏向遺跡、岡山県足守川流域、福岡県比恵・那珂遺跡群に認められる。
- 6) 「伝統的第V様式」にとどまった閉鎖的な地域にも居館は成立している。すなわち、現状で府下で唯一の居館、南河内地域の尺度遺跡である。石川流域の左岸、羽曳野丘陵の東裾に張り出した扇状地末端の微高地上に立地する。庄内期後半の方形環濠を伴う居館で、内部に数段階にわたる掘立柱建物群の展開が確認されている。方形環濠は50m×50m程度で、面積は250m<sup>2</sup>程度と小型に属する。また、この居館は一般集落、あるいは首長家族の居住域内に立地しており、他から隔絶された状況を示さない。他地域系土器のありかたは特徴的で、1点の大和型庄内甕と若干の他地域系以外は、一定量の生駒西麓胎土の中河内型庄内甕が出土している。石川流域の遺跡に他地域系が一定量入る遺跡は確認できず、このような在り方は本遺跡のみで、中河内とのつながりが看取できる。以上の状況から、閉鎖的な石川流域では高ランクでも、巨視的には小地域首長程度の居館と理解したい。私自身は、当時の物流の拠点を占めること、その経路上に立地することも居館のランクを判断しうる一つの要素と考えており、八王子遺跡例もそのような視点での検討は必要と考えている。なお、尺度遺跡については、三宮昌弘他『尺度遺跡I』(財) 大阪府文化財調査研究センター 1999による。
- 7) 山田隆一「大阪府下出土の東海系土器とその特質」『庄内式土器研究』III 庄内式土器研究会 1992。
- 8) 赤塚次郎「東海」『ムラと地域社会の変貌』埋蔵文化財研究会 1995。
- 9) 検討会の席上、赤塚次郎氏、石黒立人氏、樋上昇氏より教示を得た。また、石黒氏からは、単発的集落は100mを越えることはなく、非常に小規模であるとの教示も得た。
- 10) その回答については、将来の調査成果にゆだねたいが、赤塚氏からは津島市域がキーポイントになるとの教示を得た。この地域は旧地形を復元すれば、木曽川の河口で海岸線付近に立地したことになり、港湾的機能を有した事が十分に推定できるからである。しかし、津島市域の遺跡群の一つである寺野遺跡では、他地域の土器は確認できないことも事実である(赤塚次郎他「寺野遺跡の出土遺物について」『考古学フォーラム』2 愛知考古学談話会 1991)。
- 11) 宮崎幹也『黒田遺跡3』近江町教育委員会 1994。
- 12) 植田文雄『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集 斗西遺跡』能登川町教育委員会 1988、同『同第11集 斗西遺跡』同 1993、同『同第12集 斗西遺跡』同 1993。

- 13) 岩崎茂『下長遺跡発掘調査報告書 VIII』守山市教育委員会 2001。
- 14) 穂積裕昌「東海系土器のなかの伊勢の土器」『第9回 春日井シンポジウム 2001年』春日井市他 2001。
- 15) 伊藤裕偉・川崎志乃『嶋抜 第1次調査』三重県埋蔵文化財センター 1998、同『嶋抜 III』三重県埋蔵文化財センター 2001。資料の実見に際しては川崎氏・伊藤氏・船越重伸氏のお世話になった。なお、今回は既報告資料であるため雲出島貫遺跡をあつかったが、雲出川流域の中核は、嬉野町片部・貝蔵遺跡であり、その概要が報告されている。(和氣清章「伊勢に於ける土器交流拠点」『庄内式土器研究』XX 庄内式土器研究 1999。)
- 16) 川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋抜 III』三重県埋蔵文化財センター 2001。
- 17) 雲出島貫遺跡での北陸系は少ないが、雲出川流域の片部・貝蔵遺跡、および西三河地域の古井遺跡群の所在する矢作川流域には一定量の北陸系が入る遺跡が確認できるようである。(原田幹「東海出土の北陸系土器」『考古学フォーラム』10 1998)。
- 18) 伊藤裕偉氏(斎宮歴史博物館)の教示による。なお、布留甕の少なさは濃尾平野も同じである。早野浩二氏によると、平成8年段階で7遺跡11個体である。(早野浩二「濃尾平野における布留式甕について」『年報 平成7年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター 1996)。
- 19) S字甕胎土研究会「S字甕の混和材を考える」『考古学フォーラム』9 1997。
- 20) 註16において、川崎氏は、田口一郎氏が指摘した北関東に至る太平洋岸沿いの「津」の存在を追認している。
- 21) 秋山浩三他「近畿における吉備型甕の分布とその評価」『古代吉備』第22集 2000。